

令和4年度第1回八戸市総合教育会議 会議録

開催日時 令和4年11月30日(水) 午前9時

場 所 八戸市美術館

構 成 員	八戸市長	熊 谷 雄 一
	教育委員会教育長	伊 藤 博 章
	教育委員会委員	油 川 育 子
	教育委員会委員	小瀬川 喜 井
	教育委員会委員	福 井 武 久
	教育委員会委員	西 山 康 巳

案 件 ○八戸市美術館を活用した授業の視察
○意見交換

開 会

(鈴木 伸尚 次長兼教育総務課長)

《資料に基づき出席者紹介》

(熊谷 雄一 市長)

皆さん、おはようございます。令和4年度第1回目の会議となります。これまで学校の方は、入学式、卒業式、記念式典等で訪問したことはございましたけれども、実際の授業というのは、まだしっかりと見たことはございません。今日のこの場をお借りして、現場を調査させていただきます。今後とも教育委員会と情報を共有しながら、教育行政の推進に向けて考えていきたいと思っておりますので、本日はよろしくお願ひいたします。

まずは美術館から、当美術館の紹介をお願いいたします。

(高森 大輔 美術館副館長)

《資料に基づき説明》

(熊谷 雄一 市長)

説明ありがとうございました。本日冒頭、司会から御紹介がありましたけれども、三澤教授、そして中奥校長にも御出席いただいております。本当にありがとうございます。

それではここで、旭ヶ丘小学校中奥校長より、学校の紹介と本日の授業について概要説明をお願いいたします。

(中奥 尚子 旭ヶ丘小学校長)

《資料に基づき説明》

(熊谷 雄一 市長)

ありがとうございました。中奥校長から「本日の授業について」、また高森副館長から「美術館について」の説明がありました。ただいまの説明につきまして、御意見、御質問などございますでしょうか。

(西山 康巳 委員)

丁寧な御説明、大変ありがとうございました。まず美術館については、従来の鑑賞を主とする美術館の形態から、いろいろな場面で体験もできる、さらに本日のような創作活動もできるというふうな取組を主に据えて活動をされている非常に興味深い、新しい形のコンセプトかなと思っ
て拝見いたしました。それを学校がどのように今後活用していくかが、これからの課題になってく
ると思っておりますけれども、旭ヶ丘小学校の校長先生の御説明にもありましたが、学校でも日常的
に校外に出て教育活動を進めている中で、今度はこういった施設とタイアップして進めていくと
いう非常に意義ある、興味深い取組だなと思っていました。今後こういう活動が特別な活動だと

いうことではなく、各学校が日常的に取り組んでいける、そういう活動になってほしいと思って説明を伺っていました。

今回、旭ヶ丘小学校の6年生がこうして美術館で授業を行っているということですが、今後、他の学校でもこういった取組を進めていくのかということをお伺いしたいと思います。

（高森 大輔 美術館副館長）

はい、そうですね。先ほど御紹介した学校連携プロジェクトに所属されている先生の学校は特に熱心で、夏休みも先生が路線バスを使って子どもたちを連れてこられて鑑賞したりという事例もございますし、今もいろいろと学校の社会科見学も含めて御相談いただいております。今後も学校のメンバーにも働きかけをしながら、積極的に使ってもらえるようにしていきたいなと思っております。

（西山 康巳 委員）

ありがとうございます。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

（熊谷 雄一 市長）

他にございませんでしょうか。

（油川 育子 委員）

丁寧な御説明ありがとうございました。私からは中奥校長先生に質問させていただきたいと思えます。この図画工作の授業を行って、子どもたちにとっては、自分たちの作品を美術館に展示するというのがゴールといいましょうか、最終的な目標だったと思うのですけれども、これまで学校内だけで行っている活動と比べると、指導の仕方でも工夫された点とか、授業の組立ての仕方でも、これまでと変えた点などありましたら伺いたいと思えます。よろしく願いいたします。

（中奥 尚子 旭ヶ丘小学校長）

ゴールが美術館ということで、やはり少し大きめの作品がよいのではないかと先生方とは相談いたしました。その大きめの作品を作る時に、子どもたちに任せきりだとイメージが湧かないと思ひまして、今の6年生は、以前にも自分たちの人型をとって、いろいろな特別活動とかで使っていた経緯がございましたので、じゃあやっぱり、その人型に自分の気持ちを落とし込んで、色とかポーズを工夫させてみようとなりました。やはり美術館がゴールということをお考えたときに、サイズは考えましたね。

指導方法は、そんなに取り立てて変わったところはありませんけれども、やはり素材の種類とか色の塗り方、立体にするときにどういう膨らませをするかというのは、学芸員の田村さんに来ていただいたときに、いろいろ教えていただいて参考になりました。以上になります。

（油川 育子 委員）

ありがとうございます。

(熊谷 雄一 市長)

他にございませんでしょうか。

(小瀬川 喜井 委員)

今日は、子どもたちが美術館という場所で授業を受けているわけですが、美術館はたしか火曜日が閉館日だと思いますので、本日は一般の方もお越しになっていらっしゃるかと思います。この活動を何時間か続けていらして、この授業に関して、子どもたちがお家でも御家族の方とお話をされる機会があるかと思うんですが、保護者の方々への御案内など、そういった点について伺いできればと思います。

(中奥 尚子 旭ヶ丘小学校長)

保護者の方にはこういう授業をしていますよ、というのは事前にお知らせをしていました。また、美術館の協力で、今日から日曜日まで、そのままの作品を展示させていただくことになっております。ですので、土日にかけて、保護者さんたちも実際のもの、子どもたちが頑張った作品を見ていただけることになっております。

(小瀬川 喜井 委員)

分かりました。この美術館に飾ることも踏まえて授業を進めていただいていたので、この現場に飾った状況で保護者の方々が見学できる、非常に嬉しいことだと思います。どうもありがとうございました。

(熊谷 雄一 市長)

ありがとうございます。他にございませんでしょうか。

(福井 武久 委員)

今回こういうプロジェクトをやってみて、美術館側と小学校側で一番大変だったことと、これは改善したいなということがありましたら御紹介願いたいです。

(中奥 尚子 旭ヶ丘小学校長)

大変協力していただいたので、あまり大変だったことは思い浮かばないんですけども。やはり、美術館から来ていただくときに、いくつか授業の候補日を設けながら調整していたので、日程調整が一番大変だったかなと思います。

あと、大きい作品を作ったので、学校での保管場所に困りましたが、体育館のステージを貸切りにしてそこでやったり、あとは図工室を貸切りにしてやりました。大変だったことは、保管場所とその日程調整ですね。以上になります。

(高森 大輔 美術館副館長)

美術館側からですと、やっぱり中奥先生が今おっしゃったように、日程のところがありまして、

美術館も普段、貸館など他の展示や企画もあるので、そこでの調整もあります。あと授業への学芸員の派遣もありましたけれども、学校でもいろいろな行事、プログラムがありますので、学芸員の勤務スケジュールと、学校の日程調整というのは大変なところがありました。

このテーマについては、夏場くらいから早めに御相談させていただいたので、場所とかスケジュールも含めて調整できたかなと思います。もし今後、こういう取組を各校でやるということになると、それぞれの学校とすり合わせが必要になってきますので、こちらからもこういう展覧会やりますよ、こういうプログラムありますよ、と早め早めに情報出しをして、学校現場に組み入れてもらうように話をしていくことかなと思います。

(福井 武久 委員)

非常によい企画なので、他の学校からもどんどん来たら大変かなと思ってですね。今こういうものが大変かな、改善点はどうかと思って聞いてみました。今後ともよろしく願いたいします。

(熊谷 雄一 市長)

ありがとうございます。それでは大体予定の時刻となりましたので、これから授業視察に入りたいと思います。

(午前9時38分 ジャイアントルームへ移動)

○八戸市美術館を活用した出前授業の視察

(中奥校長、高森副館長引率により、市長、教育長及び委員 授業視察)

- ・6年生：八戸市美術館を活用した出前授業（図画工作科）

(午前10時45分 スタジオへ移動)

○意見交換

(熊谷 雄一 市長)

それでは限られた時間となりますので、早速ではございますけれども、先ほど旭ヶ丘小学校の子どもたちの授業を視察いたしました。委員の皆様から授業の感想、御意見、御質問等がありましたら願いたいします。順番に指名をさせていただきます。まずは油川委員、願います。

(油川 育子 委員)

では、私から感想を申し述べさせていただきたいと思います。まず児童の皆さんの様子を伺いました感想と、それから、中奥校長先生をはじめとする指導していただきました先生方への感想、そして最後に私見になりますが、今後どのようにして活かしていったらよいか、どんなふうにつながっていったらよいかという、この3点についてお話をさせていただきたいと思います。

まず児童の皆さんの様子ですが、大変生き生きとしていて、今回のこの活動に真剣に向き合っている様子を肌で感じることができました。小学校6年生は思春期であるということもあって、自分自身の内面にあるものを的確に言葉で表現するというのは、難しい年齢ではないのかなと思われませんが、この活動では、言葉の代わりに芸術を通して、心の内にある思いを伝えられたのではないのかなと思いました。

今回、最終的に学校から出て授業を行ったということは、学校教育においても大きな意義があると思います。自分の作品を学校とは違う、美術館というこの壮大な空間を利用して展示できたということは、子どもたちにとって大変貴重な体験になったと思います。子どもたちの中では、美術館は芸術家の作品を展示する場所という、今までそういうイメージがあったと思いますが、そのような固定観念が取り払われたのではないかなと思ひ、私自身も固定観念を取り払うことができました。子どもたちは、それぞれに完成した作品を展示できた喜びは大変大きくて、充実感が自己肯定感につながれたと思ひ、本日のこの活動を拝見して大変感銘を受けました。

次に、御指導していただきました皆様方に対する感想なんですが、今日のこの作品とか、制作する過程を伺いまして、子どもたちが何を伝えようとしているのかを大変大事にされているという印象を持ちました。あと、様々な活動の中で普段体験できないコミュニケーションを図る、コミュニケーション能力を高めてあげようという、そういう指導をされている先生方、学芸員の皆様の思いも伝わって、これもまた感銘を受けました。

そして最後なんですが、今後どのように活かしていくかについてです。この美術館での体験を通して、子どもたちの内面に起こったのはどのようなことなのかを把握して、また次につながれたらなと思います。例えば、一度学校内にこの作品を展示したとのことですが、美術館という場所を体験することによって、次は学校でこんな展示の仕方ができるのではないかなと児童の皆さんの思いが膨らんだり、この体験を通して思いが募ったことと思ひます。それから、作品をお家に持って帰って、これをお家のどこに飾ろうかと会話をすることで、家族内でのコミュニケーションが図られれば、家族の皆さんも子どもの成長を実感する、そんな時間の流れにもなるのかなと思ひました。

それからもう1点最後なんですが、この八戸市美術館のコンセプトに「アートファーマー」というワードがあるのですが、この中には「耕す」という大変深い意味が含まれていると思ひます。大げさかもしれないですが、「八戸市の文明開化」ということにつながっていくと思ひます。できましたら、八戸市内の小学校6年生全員が今日のような体験をすることで、芸術が持つ力を肌で感じ取って、そして「八戸の文明開化」につながれたらなと思ひました。「はっふる隊」を活用したり、路線バスを利用したり、また、徒歩で来る学校もあると思うのですけれども、是非ともですね、小学校6年生が全員体験することができたら、八戸の明るい未来につながっていくと思ひました。本日は素晴らしい体験をありがとうございました。以上です。

(熊谷 雄一 市長)

はい、ありがとうございます。それでは小瀬川委員お願いします。

(小瀬川 育子 委員)

私からは感想を申し述べたいと思います。この子どもたちが、この瞬間に、この空間で、今しか得ることのできない学びといいますか、そういった時間を私も一緒に体験することができて、映像だとどうしても欠ける部分があると思うのですが、直接このライブ感を感じることができました。子どもたちがここで実際に参加して学んだこと、この経験はこれから思い出になるだけではなくて、大きな力になっていくと思いました。中には、マスクをしている姿の作品もありましたけれども、子どもたちのワークシートをちょっと覗いて見せていただいたら、多くが楽しかった思い出、最高だった、素敵だった、そんな思い出をワークシートに書き込んでいました。コロナ禍の3年間、いろいろな規制がありましたけれども、子どもたちはその中で楽しく6年間過ごして、楽しいことを見つけて作品にされたんだと感じました。また、特別な行事のことを取り上げている子どもさんたちだけではなくて、普段、先生に褒められた瞬間を切り取っているお子さんがいらして、そういう思い出も大事なことだなと感動したところでした。

また、美術館の方々が、子どもたちがこう飾りたいんだ、ここにこうしたいんだ、という希望を叶えるために、一生懸命に協力くださっていること、そしてまた、展示に当たっては禁止事項がほぼないということでしたが、どうしても子どもには危ないという理由で、最初から禁止事項を与えてしまいそうになるのですが、自由に何をしてもいいということで活動させてくださった美術館の皆様方には、本当に頭の下がる思いでございました。

そして、学校教育だけでは実現できないことというところでは、普段一緒にいない学芸員の方と子どもたちが関わって、一緒に何かを作りあげる体験は、本当にいい経験になっていると感じました。土曜日、日曜日には、きっと保護者の方もこの美術館に来て、子どもたちの作品を見られる方もいらっしゃると思いますが、美術館でしか味わえないものがあると思います。

油川委員からも、6年生みんなに体験させてあげたいというお話がありましたけれども、人との関わりという点では、例えば、他校の6年生とタイアップするとか、街の人と関わるとか、様々な人との関わり合い方を学ぶ機会としても、こういった授業は今後大事になってくるのではないかなと思いました。以上です。

(熊谷 雄一 市長)

ありがとうございます。続きまして、福井委員お願いします。

(福井 武久 委員)

私から感想を述べさせていただきます。本日はありがとうございます。美術館といえば、非常に敷居が高くて、まず入館料で何百円かかるだろうかというところからスタートしますが、今日は普通に入館することができました。奥の方には展示スペースがあって、その前にジャイアントルームという市民に開かれた場所もありまして、私は2度目の来館になるのですが、今更ながらにいろいろと工夫されたところが見られて、非常に良かったなと思っております。非常に敷居

も低くて、副館長さんも、従来の美術館のイメージとは異なるとおっしゃられていましたけれども、正にそのとおりだなと。

さらに今日、子どもたちが生き生きしながら作品を貼り付けていて、説明も本当に自信を持って話をしているという、プレゼンテーションをやっているような感じで、いろんな力が身に付いているのではないかなと改めて感動しました。是非これから教育委員会や学校とタイアップして、このような企画を進めていただければ、八戸市は文化のまちを標榜しておりますので、その一端を担える取組になればと願っております。

あと、作品については、いろいろ発達段階に応じてもあるのでしょうかけれども、工夫されていると感じました。多分、人に見られるのでここをアピールしようという気持ちも働いているのかなと思いました。帽子を持ってきたり、ジャージを使ったり、最後は作品を吊り上げて展示しておりましたので、いろんなところに工夫が見受けられました。このような取組を続けていけば、将来的に子どもたちの中からそういう道に進んだり、あるいは理解できる青年、大人たちが育っていくのではないかなと思っておりました。

美術館の一番手前の外側の所に、作品が1つあるのですが、真っ白な人の形のもので。なんだろうと思って外に出てみたら、外側にアピールしているような作品だったんですね。木の落ち葉の所に後ろ向きの子がいたんです。外側には顔とかは描かれていなくて、多分それはこの先のことになろうかと思いますが、いずれにしても、非常に感性を感じさせるものでした。話が繰り返しのようになりますけれども、今後とも、是非ともこのような取組を続けていただきたいなと思っております。今日はどうもありがとうございます。

(熊谷 雄一 市長)

ありがとうございます。続きまして、西山委員お願いいたします。

(西山 康巳 委員)

はい。大変ありがとうございました。最初でも申し上げたように、こういった市の施設と学校が連携して取り組むという授業は非常に効果的で、子どもたちにとっても興味や関心が非常に高まるものであって、意欲的に取り組む姿が見られる、そういった場面だったなと思っています。

今回、子どもたちは修学旅行の楽しい思い出を表現するという事で、もうそれ自体に興味、関心の高まりがあった部分もあったと思うんですけども、その思い出、楽しさをなんとか有効に相手に伝えようという思いが、非常にそれぞれの場面から見られたなと思いました。色であるとか、形であるとか、展示の仕方などからも、子どもたちの楽しかった思い出をよりよく表現しようとする姿勢が見られていたなと思っています。壁面に描いた絵を貼るということだけではなくて、立体的にしてみるとか、空中に吊り下げるとか、それから配置ですね。椅子の上に座らせている人であっても、しっかり腰を立てて座らせたり、ちょっと寝そべるように座らせたりしているといった工夫もあり、子どもたちの発想はすごいなと思って、感心して拝見しました。

相手に対して、より具体的にそれを説明しようとするプレゼンの場面も、子どもたちが熱心に取り組んでいて、いろいろな言葉を選んで相手に分かってもらおうとしている活動は、非常に大事な場面だなと思っています。また、聞く側もそれを理解しよう、その場면을具体的に思い浮か

べよう、というふうな形で聞いていて、説明が終わったあとに拍手をしたり、感想を言ったりと、相手に対する理解が表れていたなと思いました。そういった活動で、子どもたちがまた修学旅行の楽しかった思い出をさらに深めて、確かなものにしていった場面だったなと思います。これも、学校で時間をかけて下準備をしてきたからでしょうし、この美術館という場所を使って、新鮮に発表することができたということにあると思います。

今後また学校で取り組んでいく際に、それぞれ学校でできること、学校でなければならないこと、美術館でなければならないこと、美術館ならではの活動というところをうまく融合させて、連携して取り組んでいければ、またすばらしい成果が見られるのかなと思っていました。今回は総合教育会議という場での発表ということもあって、かなり現場の方も労力を掛けて進めてきたのではないかなと思うのですが、今後、こういった形で他の学校が取り組んでいこうとしたときに、多くの学校が取り入れやすいプログラムといいますか、フォーマットといいますか、そういう部分の構築が求められてくるのかなと思います。多くの学校がやってみたい、やりたいと思えるような、そういった取組を今後展開していけるように期待しております。今日は大変ありがとうございました。

(熊谷 雄一 市長)

ありがとうございました。委員の皆様からそれぞれ感想を述べていただきましたけれども、その他に御意見、御質問等がありましたら、せっかくの機会ですので御発言いただきたいと思えます。

(小瀬川 喜井 委員)

少し御質問いたします。とてもすばらしい取組だということで、共通の意見として、他の学校でもということが出ていたと思えますけれども、私もそのとおりかなと思っております。美術館が八戸の未来を創るというコンセプトですが、八戸の未来は、子どもたちの未来でもありますので、この取組を大勢の方に知っていただきたい、参考にしていただきたいと思うんですが、学校はもちろん、美術館としても、今日の取組等をどのように発信していかれるのか、お伺いしたいです。

(高森 大輔 美術館副館長)

はい。今日マスコミの方も取材で来られていますけれども、私たちもこの活動の写真や動画を撮っていますので、美術館のホームページだったり、他の広報媒体だったりとかでも今後取り上げていきたいなと思っています。あと、学校に対しても、年に何回か校長会などを通してプレゼンさせてもらえる機会がありますので、そういうところでも今日の様子をスライドで紹介しながら、是非こういう使い方を一緒にやりたいですということでアピールしたいと思っています。

(小瀬川 喜井 委員)

具体的な様子が分かる写真等があれば、本当に他の学校の皆さんも活用しやすくなるかと思えます。どうぞよろしく願いいたします。今日はありがとうございました。

(熊谷 雄一 市長)

ありがとうございます。他にいかがでしょう。よろしいですか。そうしましたら、皆様から様々な御意見をいただきました。それでは、今日はお忙しい中おいでいただいた三澤教授から、本日の授業に対しての御意見、御感想などありましたらお願いいたします。

(三澤 一実 武蔵野美術大学教授)

武蔵野美術大学の三澤です。今日は非常に楽しい時間をありがとうございました。皆様の中で、今日、子どもたちに質問された方はどのくらいいますか。手を挙げてください。

《出席者、全員挙手》

はい、そうですね。これは学校でできないことなのです。学校だと外部の方がいない。なぜ美術館を使うかという、美術館は社会とつながる教育施設なのです。そのように捉えていく必要があります。外の方が入るという意味は、子どもたちが普段話もしたことがない人から質問をされて、それに答えて、そこで自分の考え方が少しずつ見えてくるのです。そして、それが認められた時に、初めてその子は社会とつながっていると、社会から認められたと感ずるのです。子どもだから社会とつながっている感覚はないかもしれませんが、それが自尊心とか自己肯定感を高めることにつながっていくのです。

つまり私たちは、子どもを学校の中に閉じ込めておくだけでは、社会とのつながりができないのです。よりよい市民の育成を考えたときに、子どもが社会とどのように関わられるかという場を作っていく必要があるのです。それがまさに、この美術館ができることです。だから、今日の授業の一番の先生は、ここにいた人たちです。皆さんがいろんな質問をしてくれたので、子どもたちは育って自信を持てる。これが美術館の大きな役割ではないのでしょうか。

美術というのは個人の内面性の表現ですから、自分の感じたこと、考えたことを絵に表したりするわけですね。それを見て、自分とは違う人がそれを理解して、共感してくれて、他者とのつながりがそこにできるわけですよ。この人と人とのつながりって、今の社会、とても重要ですよ。特に、AIとかインターネットが進化していく中で、どうしても人間関係が希薄になっていくので、この美術館の歩みというのは、とても重要な意味を持つと思います。

今後の100年間のことを考えて、スライドを見ていただこうかなと思います。これからの美術館を100年の中でどうやって活かし続けていくかを考えた時に、やっぱり美術館に来てくれる先生を増やさないといけないのです。学校教育は義務教育ですから、八戸の市民のみんなが受ける教育です。学校教育が充実すれば、八戸の全市民が充実していくわけですよ。ですから、学校がとても重要であるということで、今、埼玉県で取り組んでいる事例がありますので紹介します。ちょうど7年目になるのですが、これは埼玉県の入間地区の教頭会で話をしてくれということで作ったプレゼン資料になるのですが、所沢市の三ヶ島中学校で始めた「朝鑑賞」という活動になります。朝読書の時間の朝10分間、そこで週1回だけ鑑賞をやろうとなったのです。絵を見よう、絵を見て話そう、と。

今日はここで児童が友達の作品をお互いに見合っていました、大学生とか地元の作家とかの

作品を見て、みんなで言いたいことを言う。これが最初のスタートですね。「朝鑑賞」というのは、学校で各担任が行うのですが、この動画では家庭科の先生がやっています。

《DVDによる動画資料に基づき説明》

(三澤 一実 武蔵野美術大学教授)

一人の男の子が絵を見て「肝臓」って言ったのです。周りは笑っていましたね。普通、学校でこのようなことがあると、すごく恥ずかしくなって発言したくなくなるのです。でも、この絵をずっと見ていると肝臓に見えるのです。彼は、肝臓は血の蔵器だということを知っているし、形がどんな形か知っているから肝臓に見えたのです。つまり、彼は知識を持って肝臓という形に見立てたわけです。それをみんなが知ることとなって、なるほどなって思ったわけです。だから、表面的には「おかしなことを言うやつだ」という解釈が、対話の中で「なるほど」という他者理解に変化していく。このことは重要じゃないですかね。

学校教育では、答えを言わなきゃいけない、正解を言わなきゃいけない、正しいことを言わなきゃいけない場面が多いと思いますが、自分の率直な感じ方を言って、それを他者が理解する。つまり、他者が「なんでそんなことを言うんだろう」って、しっかり聞くことができた時、コミュニケーションとして成立するわけです。

《DVDによる動画資料に基づき説明》

(三澤 一実 武蔵野美術大学教授)

この家庭科の先生は、チャイムが鳴った後は別にまとめることなく、このことを「オープンエンド」といいますが、鑑賞の話がそのまま終わっちゃいます。これを週1回やるとどうなるかという、所沢の中学校の事例になるのですが、この学校は学力が低い学校でした。国語の書く力のみに特化した調査になりますが、1年生の時の平均は21点以下。1年間やったら平均レベルまで上がったのです。考えてみると、もともと低かった理由として、0点を取った子がいたのです。要するに、文章が書けない、自分の考えたことが書けないのです。それが1年経ったら、その数が減りました。これはどういうことかということ、朝、絵を見ることによって、自分の頭の中に映像が浮かびます。こうなんじゃないか、ああなんじゃないかって、イメージを持つと思うのですが、そのイメージを言葉にすると、発言になり、文章が書けて、文字になるのです。つまり、イメージを持つことが重要なのですが、そのイメージが浮かばなければ、学力は伸びていきません。

1年生では書く力が伸びた。2年生になった時はテストの変化はなかったのですが、部活動などで自主的に話し合う姿が出た。ここの学校は、もともと部活を重視している学校で、先生の言うことに対して子どもたちはハイハイって話を聞くのです。でも自分たちでは考えない、言われたことをやっている。それが、自分たちで自主的に話し合うようになる。これは、朝鑑賞の場で、自分たちで話し合う、言いたいことが言える、聞いてくれるという、そういう環境がもたらした変化です。3年生になったときに、偏差値が所沢15校のうち底辺レベルから平均レベルに上がりました。あとは、今までになく進路決定が早く決まりました。「メタ認知」というのですが、他者

の考え方を知ることによって、自分と他者の違いを知り、自分はどのように生きるべきかということを考えざるを得なくなる、ということです。他の学校でも同じような調査が出ています。自己肯定感と学力アップです。これは、美術で絵を鑑賞することによって変化するのです。

《DVDによる動画資料に基づき説明》

(三澤 一実 武蔵野美術大学教授)

実は先ほど言ったように、絵を見るというのは、その一人一人の経験の中から、その言葉、イメージを作って紡ぎ出すので、一人一人みんな違う見方ができるのです。それを他者が知るとその子を理解していく、他者理解が進んでいく、同時に認めてもらうことで、自己肯定感が生まれます。その結果、不登校の子が減っていくということも現象としてあります。そのような絵を見るということを、この美術館を中心に広げていけるのかなと思います。

今日の活動もまったく同じです。ちょっと活動の内容は違いますが、自分の作品を見てもらって、他者から質問してもらって、自分のことを答える。つまり、個人と社会を結び付けていくのが美術館の役割になりますので、そこをしっかりと考えていく必要があるだろうと。現在、ある学校ではデジタル朝鑑賞もやっていて、大学の学生から年間3,000円で作品を貸してもらって、それをデジタルにしてリンクを貼って、いつでも鑑賞できるようにしています。今はこれを使って朝鑑賞をやっているのですが、先日、昨年の10月に始めた学校の校長先生にも話を聞いてきました。

《DVDによる動画資料に基づき説明》

(三澤 一実 武蔵野美術大学教授)

その校長先生は「朝鑑賞の中での先生の「問い」が大事な役割を果たしていると感じる。」ということでした。今日、皆さんが子どもたちに「問い」をかけていただきましたが、子どもたちの能力が伸びるような「問い」だったのでしょうか。つまり、これが教育に求められていることなのです。施設を造って、イベントやその他事業ができるかと思いますが、それ以前に根本的な先生たちのファシリテーション能力を磨くことで、この八戸の美術館をもっと大きいものにしていくような感じがいたします。そういう点では、教員研修の施設にもなりますよね。ここに来て、対話、鑑賞していただいて、「問い」を磨く力をつけるとか。そのことによって、学校全体の学習、授業が変わってくる、質が変わってくる。それが、一人一人をしっかりと認められるような教育になり、学力が上がって自分から進んで考えるようになってつながっていく。ですから、美術館というのは、絵を見る、作品を見て楽しむだけではなくて、人間が生きる本質的なそのような「問い」になっている部分を機能させていけば、多分100年計画として、見事に花を開くのではないかなと思います。以上です。どうもありがとうございました。

(熊谷 雄一 市長)

はい、ありがとうございました。それでは、これまでの意見を踏まえまして、教育長からお願いいたします。

(伊藤 博章 教育長)

今日は本当にありがとうございました。特に学校と美術館が連携した授業ということで、興味深く拝見いたしました。子どもたちと私どもはみんな初対面なんですけれども、コミュニケーションの能力が非常に発達しているというか、誰も物怖じせずに受け答えをしていたので大変驚きました。こういう授業では人見知りする子どもも少なくないのですが、旭ヶ丘小学校の今日の6年生、最上級生ですけれども、なんでこんなに明快にパーンと返ってくるのかなと考えたら、きっとこの9時間の授業の中で、自分の伝えたいものとか、あるいは作りたいものというのが明快になっているのだらうと思いますね。だから、ドッジボールをしている作品の子どもに話を聞きに行ったら、一番苦労したところはどこかを聞いたら「膝を曲げてボールを投げようとするところで、なかなか上手く立たなかった。」と、自信を持って答えていました。それだけ彼にとっては、あれが6年間で忘れられない思い出だったんだと思います。

それから、2階も自由に使わせていましたね。階段も含めて自由に使っていたことにも驚きましたし、上に作品を飾った子に、大きい模造紙2枚ぐらいの木があって、そこでぼんやりと眺めているような作品があったんですね。私は、函館から物憂いように景色を眺めているのかと思って作者に聞いたら、実は小学校3年生の時に逆上がりができなかったので、それを練習しているところだと教えてくれました。その隣の子の作品は、人から炎のようなものが出ていて、これは手すりを綱引きの縄に見立てて、それを一生懸命引っ張っている姿、その体から炎のようなものが出ていたんです。顔からは汗も滴り落ちていましたね。

もう一人の子は、小瀬川委員も言いましたけれども、先生に褒められたというワークシートがあったんですね。その子の作品を探しても、なかなか見つからなかったのですが、この美術館の中で、外側を見ている絵が一枚だけあったんですね。ちょうど入口の端にあったんです。それを見つけて、私は寂し気な感じの絵かなと思ったら、そこに作者がいて「この絵はどういう思いで描いたんですか。」と聞いたら「先生に褒められたときです。」と。だから、その作品は少し気恥ずかしいようにしているんですね。「何で外の方を向けたんですか。」と聞いたら「おばあちゃんに真っ先に見てもらいたいから。」って言っていました。子どもたちも、土日まで作品を展示しておくことができることを知っていたのかな。

あの一つ一つの作品に、本当に50数名の子どもたちの思いがよく出ていました。それから、子どもたちの受け答えも、普段のしつけだけではなくて、それだけ伝えたいものを持っている。9時間の授業の中でそれが溜って、誰であろうと聞かれたら、自分の思いをパッと伝えられる、すごいなと思います。美術館が、学校での学習成果を発表できる場所になっていること、そういう発表の場所にしてくれたということは、大変素晴らしいことだと感じています。子どもたちにとっても、必ずや美術館が身近なものになっていくんだろうと思います。

先ほど担当から聞いたのですが、明日、中学校の校長先生方が美術館を見にくるらしいですね。学校のリーダーである校長や教頭、学年主任たちが、まずこの美術館に足を一度運んで、この美

術館をどういうふうに活用できるのかを学校の経営者自身がもっともっと考えていくことが大切ですし、そういう始まりの1年として、新たな第一歩を踏み出せた今日の発表だったなと思います。これからも、より多くの学校、小学生だけではなくて中学生も含めて、学校と美術館が連携することが重要になってきます。例えば、この美術館のジャイアントルームなんかは、もう教育資源の一部ですので、この教育資源を活用できるように、美術館の学芸員からも大いに学校に働きかけてほしいなと思います。

今日は三澤先生がおいでですけれども、4、5年前に長者中学校で「黒板ジャック」という取組が行われました。恐らく先生の美大の教え子さんたちだと思いますが、その大学生たちが来て黒板にチョークですよ、私たちがいつも使い慣れているチョークで大きい黒板に絵を描いているんです。特別教室に7、8つの教室ですかね。昨日、当時の校長に電話して、そのときのことを聞いたんです。子どもたちが翌朝出校してきて教室を開けた途端に、言葉が出ないぐらいやっぱり感激した、感動したと。私も校長から電話をもらって、すぐ見に行きました。上手いとか下手とかそういう問題じゃないんですよ。表現することの素晴らしさ、本物に触れることの素晴らしさというのかな、そういうのを私自身も感じたし、中学生の子どもたちもきっと感じたと思うんです。それから近隣の小学校、あるいは幼稚園の子どもたちにもお知らせして、見に来たそうです。私は、当時の校長に、全部消さないということは難しいけれども、いくつかの教室はひと月、ふた月残しておいてほしいということで、年末まで保存しておいたんです。

だから、そういうこともありましたので、今日の三澤先生の御提言の「朝鑑賞」ですか。1週間に1回ね。私は教育という面でも少し考えてみよう。私どもも朝読書はやっているのですが、美術的な感性を豊かにするということは、とても大事なことだと思いますので、これからも御指導いただければと思います。また、美術館の学芸員、あるいは旭ヶ丘の校長先生をはじめ、本当にありがとうございました。感激をいたしました。

（熊谷 雄一 市長）

ありがとうございました。先ほどの朝鑑賞のように、オープンエンドで終わってもいいような気がします。最後に本日の会議を総括して私から一言申し上げます。私は、教育現場に携わった経験がありませんけれども、率直な印象といたしまして、まずは6年間の思い出をああいいう形で表現するというは大変すばらしいなと思いましたし、それぞれに、それぞれの思い出があって表現をしたわけです。それをお互いに感想を述べ合い、お互いを認め合う。もうちょっと難しく言うと、個性を尊重し合うというんでしょうか。そういうことが感じられまして、非常に感動いたしました。

私は、市政運営にあたって「対話と共感」ということを掲げております。正にそれぞれの作品に対して、お互いに意見交換をして対話をする。そしてお互いを理解して、認識を共有して、もう少し言えば、共感を生み出しながら一緒に成長していくんだらうなという感想を持ちました。

最初は校長先生に御案内いただいていたのですが、途中から数名の小学生がずっと私を誘導してくれていまして、私のことを「師匠さん、師匠さん」と呼ぶので、何の師匠と間違っているかなと思っていましたが、そのうち、ちゃんと「市長」と言い直してくれたりもして、たわいもない会話の中でも、そういう思いやり、積極性を感じることができました。たしか鑑賞し合う時も、

誰も集まっていない作品の所に行くことを指導されていましたけれども、そういうことも心の豊かさを育てることにつながるのかなと思いました。

あとは、美術館は社会とつながる教育の場だというふうなことで、非常にありがたいことを言っていました。そして、また本質的な「問い」を感じられる場面だということで、生きることの本質というものを育むことが、もしかしたら、この美術館なのではないかなと思いましたし、できれば積極的にこれを発信しながら、この教育をまたつなげていきたいと思っております。

最後ここに戻ってくる前に、ちょっとだけどういう授業をやるのかなと思って見ておりましたら、先生がこう言ったんですね。「9時にここに来てスタートしてやってきたけれども、今はどうですか。皆さんの思い出がいっぱい飾られているでしょう、良かったですね。」と。そうしたら、先生が言うなり、ワーッと拍手をしたんですね。それだけでも、非常に自己肯定感は育まれたのではないかなと思って、本当に感動して今日は一日を終えることができました。本当にありがとうございました。

以上で、これで意見交換は終了いたしますけれども、本日は生の教育現場を見ることができ、子どもたちの思いを身近に感じながら有意義な意見交換を過ごすことができました。御協力いただきました旭ヶ丘小学校の中奥校長先生をはじめ、各先生方に改めて御礼を申し上げます。今後ともこの美術館を活かしながら、あるいは八戸には他の教育施設もあります。是川縄文館、博物館、児童科学館などもありますので、それらとも連携しながら、いろいろな学習活動を実践していきたいと考えておりますので、皆様方の御協力をよろしくお願いいたします。

(午前11時35分 閉会)